たより

ユッカの会会報 第20号 平成20年12月13日(土)発行
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター12階
かながわボランティアセンター(情報コーナー)内 ユッカの会代表 沼波万里子

世代の流れ・・・

沼波 万里子

裏山の樹々がすっかり枯れ色をなし、今年も終わろうとしております。歳と共に一年の経ちますのが本当に早く感じられるようになりました。

ユッカの会も創立二十年を迎え、いよいよ活発に活動をつづけており頼もしいかぎりでございます。純粋な運営が公(おおやけ)にも認められ、仕事に携わる方々のご苦労も並々ならないことと存じます。

最近は地球の温暖化が進み、今夏の暑さも格別で、ようやく大望の雨が降りますと今度は信じられない程の大雨、大洪水をひきおこし、各地でかなりの被害が出ました。景気も世界的に不況で、このような時こそ心をひきしめてゆかねばならないとしみじみ思う昨今でございます。
又、アメリカには初の黒人大統領が誕生するなど、世界の流れがどんどん変わってゆくのを感じます。

当会も創立当時の帰国者が既にお孫さんの世代に移っており、今では戦争を知らない若者が対象となってきております。
現代の若者にとっては、かって有望な若い方々が戦争にかり出され尊い命を失った日の事が、香(とお)い歴史の物語としてのイメージしか思いうかばないのではないでしょうか。ご指導なさる皆様も、どうぞご無理のなきよう、時に応じた対応を心よりご期待申しあげます。

尚、私事で恐縮ですが、この程大手術のあとの後遺症もようやく落ち着き、何とか外出も出来るまでに恢復いたしました。
ご心配をおかけしました事、お詫び申し上げますと共に、今後ともよろしくお願い申しあげます。

たまわりしユッカひともと青々と
四季変わるなく励まされをり

(ユッカの会代表)

ユッカの会の受賞報告

大石 俊雄

平成20年11月20日、横浜市と横浜市社会福祉協議会の主催による「第28回横浜市社会福祉大会」が、中区尾上町の関内ホールで開催され、ボランティア活動功労に尽力されたとして、下記内容の表彰状を受理いたしました。

表彰状

ユッカの会様

貴団体は多年にわたり奉仕の精神をもって地域社会の福祉の向上のため協力援助されまたその功績は誠に顕著であります

よってここに表彰します

平成二十年十一月二十日

横浜市長 中田 宏

当日、市長は出張のため代読、各部門別の代表者が壇上で受理いたしました。

表彰式典の前に大学教授の記念講演がありました。テーマは「地域における新たな支え合いを求めて」と題し、約一時間半お話しされました。

その内容の一部を紹介いたします。

「最近の社会福祉対象変化の背景」について

１．単独所帯の増加

世帯構造が多世帯同居型から単独世帯、夫婦のみ世帯に変化。

世帯主が75歳以上の世帯では、2000年の394万世帯から2025年には645万世帯に増加、

特に単独世帯は、2000年の139万世帯から2025年には422万世帯でほぼ3倍に増加見込み。

２．近隣関係の希薄化

近所付き合いが年々減少傾向

３．社会的つながりの脆弱化

社会や経済環境の変化が、共に支えあう機能を脆弱化させている。

終身雇用などの雇用慣行の崩れ、世帯規模の縮小や家族による扶養機能縮小・非婚など家族の縮小を始め様々の要因で、弱体化してきている

４．課題

社会的孤立は、高齢者だけでなく広く国民の間に広がっており、対応には、自助・公助と並んで地域の共助が必要で、自治会、町内会、子供会、老人クラブなどの担い手のほか各種ボランテイァの活動が必要とされる。

５．ユツカの会も、設立から二十年、諸先輩はじめ多くの人々の協力と活躍に感謝し、我々ボランティアも健康である限り、年齢には関係なく、いつまでも元気で、また若い人の参加も期待し、学習者も安心、安全な明るい日々を、お互い支えあって送りましょう。（横浜教室・ボランティア）

私の故郷、西安

王 嫻

私のふるさとは中国陝西省西安市です。西安は陝西省で一番大きな都市で、省都です。昔から、13の王朝時代は首都を西安に定めたので、長い歴史を持っている町で、有名です。昔の名前は長安で、西暦1369年西安に換わりました。毎年国内や、外国からも観光客がたくさんきます。西安は日本の京都と友好都市です。西安は中国の真ん中にあって、海がなくて、きれいな山がたくさんあります。その中で華山が一番有名です。華山は中国の五つの有名な山の一つであって、中国の西部で代表的な山です。西安で暮らしている人は漢民族だけではなく、少数民族の人も多くて、特にイスラムの回族とウイグル族が多いです。食べ物は辛、酸、イスラム風を主として、美味しいです。農業が発達しているので、いろいろな新鮮な果物がいっぱいあって、安いです。でも、西安の地理的位置は現代の西安の経済発達の遅れを決定づけています。最近地下鉄の工事が始まりましたが、進度はとても遅いです。地下にたくさん文物が埋めてあって、気をつけなければなりません。そのため、工事現場の周りに警察も泥棒もいっぱいいます。都市建設がますますよくなります。地下鉄の工事が完成すれば、都市中心だけではなく、周辺の町や観光地に行くのに便利です。それに、直轄市の申請の可能性が大きくなります。

漢代の製紙術模型

宋代の印刷術模型

西安では文化的雰囲気が濃くて、歴史の原因だけではなく、大学がたくさんあります。大学の数は全国で三番目です。全国各省から来る学生が集まって、いろいろな方言が聞こえます。一番有名な大学は百年以上の歴史を持っている交通大学です。国内戦争のため、1956年上海から、西安に移されました。そのとき上海では少部分的に残りました。今は西安交通大学も上海交通大学もあって、兄弟大学です。でも、今は上海交通大学がもっといいです。政府からも上海市からも資金がたくさんもらえるし、若い研究者たち（将来の教授）は西安より上海のほうが好きだし、給料も多いし、それに、1956年の移転時に西安に来た教授がほとんど退職して、西安交通大学は人材がかなり足りませんから。交通大学は交通に関する専攻は全然なく、工学と管理学を主とし

ての総合大学です。西安交通大学のキャンパスはとても大きくて、美しいです。四大発明（紙、活字印刷、火薬、羅針盤）を模った石像があるし、大きな噴水池があるし、それに桜並木もあります。西安交通大学は、私が日本へ来る前に七年間勉強した私の母校です。将来機会が有れば、西安交通大学で先生になりたいです。

皆さん是非西安へ来て見てくださいね！（横浜教室・学習者）

横浜のおもしろいこと

陳 麗霞

私は陳 麗霞といいます。今年の4月末に日本に来て、横浜に住んでいます。横浜では、いろいろな面白いことがありました。私の人生のいい思い出になりました。さあ、これらのいい思い出を、皆さんとシェアしましょう。

日本へ来た最初の頃、日本語がぜんぜんわからなくて、一人で、家で「あいうえお」から勉強し始めました。しかし、なかなか彼たちと仲間になれないですね。ある日、辞書を持って友達と一緒に「五目並べ」を買いにいきました。でも、デパートで、話せませんから、辞書で調べながら、一生懸命スタッフに買いたいものを説明しました。そのスタッフは、私たちが何を買いたいのかわかったみたいで、そのものを探しにいきました。その時、私はとても嬉しかったですが、しばらくすると、スタッフが「五目御飯」を持って来ました。その時は、日本語がわからないと、日本での生活は大変と深く感じました。それから、私たちは、日本語をしっかり勉強しようと決心しました。友だちからの紹介で、ユッカの会に入って、親切な大内先生に出会いました。

大内先生は、とても親切で、優しい先生です。中国語も上手です。大内先生から、日本の文化や、風物や、食べ物などいろいろなことを教えてもらいました。ある日、「誕生日」の勉強をしたときに、先生から、横浜開港記念日は私の誕生日と同じで、しかも、先生の誕生日は中国の孔子と同じだと聞きました。やはり、私と横浜はとても縁がありますね。先生も中国と縁があります。

横浜の風物というと、やっぱりランドマークとコスモクロック21ですね。特に夜は、その辺はとてもきれいです。一番幸運なことは、私が今住んでいる部屋の窓から見ると、ランドマークや、コスモクロック21などは、全部目の前にあります。毎晩、それを見ながら家族と一緒においしい料理を食べていると、「幸せな人生はこれかな

あ」とよく感じます。横浜にきてよかったと思います。

横浜の食べ物といえば、やっぱり中華街ですね。私は中華料理が大好きです。中華街にいくと、ふるさとに戻った感じがします。日本の料理もたくさんありますが、なかなか慣れません。友達と一緒に中華街に行った時、ある店の前で、焼いた鳥や、焼いた鴨がお店の前にお皿に載せて並べてありました。わたしは、もう長い間、焼いた鳥や、焼いた鴨を食べていなかったです。それをみると、すぐその店に入りました。美味しくて、それを食べ終わったら、焼いた鳥や、焼いた鴨と記念写真を撮って、中国にいる友たちに見せたら、「食い意地がはった猫」と言われました。

日本の桜もきれいですね。でも、残念ながら、今年4月末に日本にきたときは、私の心のロマンチックな「さくら」はもうなくなっていました。また、来年のお花見を楽しみにするしかないですね。

日本の文化は、中国とは、違うところがたくさんあります。たとえば、日本では、

友達が、私を誘って、レストランに御飯をたべに行くときに、会計は、別々ですね。中国は、普通は、誘う方がお金を払います。誘われた方は、お金を払いませんが、今度は、お返しに友達を誘います。

ユッカの会の先生から、いろいろなことを教えてもらって、本当にありがとうございました。日本語が上手になったら、私も中日友好に、貢献したいと思います。（横浜教室・学習者）

尾瀬の思い出

星 ノブ

尾瀬は郷里の近くであるせいもあって、何回も行った。たぶん5回は行っていると思う。ただ、最後に行ったときからでも30年近くの歳月が過ぎているので、細かいことは忘れたり、記憶が重なったりして、判然としないことが多い。

最初に行ったのは、終戦の年の8月のことだった。当時、女学校の2年生であった私は、家を離れて下宿生活をしていたが、そのときは夏休みで郷里に帰っていた。村の青年たちは、田植えが終わった後の休暇とか、旧暦のお盆の休みのときなど、近くの田代山に登山したり、尾瀬行きを楽しんだりするのを恒例の行事としていた。その年の青年たちの尾瀬行きに私も加えてもらったのである。

出発は、多分8月20日前後であったと思う。戦争に負けたということについて、大人も子供もそれほど強い衝撃はなかったようだった。山奥の村には、中央の波紋はそれほど強く伝わらなかったということだろうか。変化と言えば電灯を覆っていた灯火管制の黒い布がとれて、明るい夜になったということくらいだった。だから、前から計画されていた尾瀬行きは特に支障なく予定どおり行われたのだろう。同行6、7人であった。

このときの往路はわが村から尾瀬まで、全行程徒歩だった。

まず木賊峠を越える。これは村内にある峠なので、さしたることはないが、次の小繋峠はわが村と桧枝岐村との境界であり、行程も長く難路であった。じめじめした原生林で倒木が行く手を遮り、道らしい道がなく、ベテランの先達がいないと迷ってしまいそうな道だった。帰路にはもうこの道は通らなかったし、翌年の尾瀬行きのときも通らなかったから、この峠を越えるのは、青年たちもこのときが最後だったのかもしれない。

山道を抜けると自動車の通る道に出て、まもなく会津駒が岳の登山口が見えてくる。なおしばらく行くと桧枝岐の村落に到着する。これが一日のコースで桧枝岐に一泊した。かなりの強行軍であった。

夕食を終えたころ、太鼓の音が聞こえたので行ってみると、小学校の校庭に村の青年たちが集まっていた。次第に人が多くなってきて、踊りも始まりそうな気配になったとき、校庭を横切って急ぎ足で近寄ってきた人が、突然

「やめなさい！」と大声で叫んだ。

「日本は戦争に負けたのだ。大勢の人が死んだ。こんなとき太鼓などたたいて、浮かれていていいのか。兵隊さんにすまないと思わないのか！」

はっきり覚えていないが、大体こんな内容だったと思う。もっと長かったかもしれない。言い終わると再び校庭を横切って校舎に入って行った。この人は小学校の校長先生だった。怒りと悲しみで全身が震えているような後ろ姿だった。この姿がはっきり見えたのはその夜、月が出ていたからだと思う。

青年たちは声もなく太鼓を片付け、帰って行った。戦争は終わったことだし、しばらく絶えていた盆踊りでもしようと思ったのだろう。そして翌年は多分盆踊りが行われたことだろう。戦争に負けるということはどういうことか、このあとだんだん分かって来たが、このとき初めて強い衝撃を受けた。影絵のようなこの桧枝岐の夜の光景は、今も心の底に残っている。

翌朝早く、昼食のおにぎりを貰って出発する。沼山峠の入り口まで平坦な道を2里、沼山峠は前日の小繋峠よりずっと歩き易

い。頂上に着くとまもなく眺望が開け、柔らかい笹原となり、その向こうに尾瀬沼が見える。沼の岸辺の長蔵小屋までなだらかな下り道で、湿地帯にはヤナギランが咲いていた。これが尾瀬の第一印象であり、尾瀬第一の佳景であると、今も思っている。

昼頃長蔵小屋について荷物を預け、身軽になって三条の滝に向かう。木の根の張った細い急な道を、深い谷川に沿ってどんどん下って行く。木の間がくれに平滑の滝が見え、やがて三条の滝が見えるところに出る。滝の落差90米、水量が多く豪快な眺めであった。尾瀬沼から流れ出るこの沼尻川は、只見川に合流し日本海に注ぐのである。

長蔵小屋は電気がなくランプだった。当主の平野長英さんは二代目、物静かな学者タイプの人のように思われた。初代の長蔵さんは桧枝岐の人で、妻のとめさんは私の村の出身である。

翌朝、長英さんの妹の都さんが、沼に舟を浮かべて私達を案内して下さった。艪で漕ぐ大きな舟で、沼の魚を捕るためのものらしかった。沼ではヒメマスが捕れるという。周囲には深く朝霧が立ち込め、都さんの漕ぐ艪の音だけが静かな水面に響いていた。このようにして都さんは母親の郷里から来た人達をもてなしてくれたのだった。

帰路は桧枝岐まで歩いて、それから自動車に乗ったのだと思う。定期バスなどなかったし、多分トラックに便乗させてもらったのだろう。

翌年、ほとんど同様のメンバーで出掛けたときも、トラックに乗せて貰ったらしい。一日のうちに一気に尾瀬ヶ原の入り口まで行って、宿泊した。そのときは燧岳登山が目的だったので、出来るだけ山の近くまで行きたかったのだ。燧岳2356メートル、東北一の高山である。山頂付近は大きな岩がごろごろしていて登りにくかったが、初めて2000メートル級の山に登った爽快感は忘れられない。

それから10年ほどして横浜学院に勤務していたとき、中学生、高校生35、6名を引率して至仏山に登った。このときは鳩待峠を越えて尾瀬に入り、山の鼻小屋に2泊した。至仏山はなだらかな美しい姿の山で登り易かったように思う。それでも、標高2228米、低い山ではない。蛇紋岩の露出した山頂は草木が茂らず、道らしい道がない。はぐれてしまったら大変、特に下りは要注意であった。この至仏山と燧岳に登ったことによって、尾瀬ヶ原の景観が一層親しく感じられるようになった。

尾瀬ヶ原では、生徒たちと池塘に姿を映したり、浮き島を探したり、草花を観察したりした。食虫植物のモウセンゴケは小さな草で、丸葉のものと長葉のものがあること、繊毛が葉の全体についていて、その先のねばねばした液体で小さな虫を捕らえて食べる。虫を捕らえたモウセンゴケを探

したりした。夏の尾瀬ヶ原はなんと言ってもニッコウキスゲである。水芭蕉は5月か6月でないと見られない。8月は葉だけが大きく茂っている。

そう言えば私が尾瀬を訪れたのは、いずれも八月だった。春とか秋の季節に訪ねたら、また違った景色に出合えるかもしれない。水芭蕉も見たいし、山毛欅の原生林にも行きたい。山毛欅の若葉の芽吹くころ、そして黄葉のころ。尾瀬ヶ原の草紅葉も、きっと素晴らしいことだろう。秋の空は深い藍色に澄み、池面に白い雲を映し、夜空の星は輝きを増すだろう。あの峠を越え得る脚力のある間は、行こうと思えばいつでも行ける。そう思いながらずっと行っていない。

かつて日光国立公園の一部であった尾瀬も、平成19年9月から尾瀬国立公園として単独で国立公園となった。そのついでに栃木県との県境にある田代山や帝釈山も国立公園に含まれることになった。

田代山は子供のころ登った記憶だけだが、山上に湿地帯があり、登山道の途中に湯ノ岐川の水源があり、山頂に弘法小屋という無人小屋があったが、今はどうなっているだろうか。（ユッカの会・ボランティア）

箱根行

張 坤

2008年10月19日　天気快晴、私はユッカの会が主催したバスハイクに参加しました。

朝8時27分に105人が2台のバスに分乗し、横浜駅西口から出発しました。バスにはインド人、フィリピン人、韓国人もいました。一番多かったのは中国人です。

バスは海老名で10分の短い休憩を取ったあと、東名高速を更に走り続けました。この時、引率の先生が指差す方を見るとああ！初めて日本一の山、富士山が見えたのです！本当に雄大で、壮観、真っ白な山頂が実に美しかったです！

10時18分箱根の第一番目の名所“関所跡”に到着しました。全員で写真を撮った後、見学を始めました。聞くところによると、ここは昔江戸へ出入りする時、“入り鉄砲と出女”を重点的に調べる関所だったそうです。まるで本物のように生き生きとした塑像を見ると、彼らが厳しい環境の中で真面目に仕事をしていたことが想像できました。

“関所跡”を見学した後、11時30分にバスは“箱根湖畔荘新館楼本陣”に行って和風の昼飯を食べました。

1時10分、私たちは芦ノ湖で海賊船に乗

って遊覧しました。周囲は高い山々が何層にもなって重なり合い、山上の木々は色とりどり、静かな湖面は鏡のよう、太陽の光に照らされて、水中に映る山々は更に高くそびえ、大変美しい景色でした。私は、これはまさに、大自然の神々のなせる技と感嘆せざるを得ませんでした。私が景色に見とれていたとき、急に、水面の山々の姿が消えてしまいました。アヒルの形をした小さな船が湖面の平静を破ったのです。

2時15分に私たちは最後の見学場所、“大涌谷”に向かいました。バスを降りると山々が煙霧に包まれているのが見えました。這い上がると鼻をつくような臭い―硫黄の臭い―がしました。タマゴをこの天然の硫黄ガスの池に入れて1時間ぐらい煮ると黒色に変わります。これが、つまり大涌谷名物“黒タマゴ”です。一つ食べると寿命が7年延びるといわれています。日本は長寿の国で100歳以上のお年寄りがたくさんいます。私は、彼らは皆ここで黒タマゴを食べたのだと思います（可笑)。

午後4時には帰途に着き、帰りのバスの中では皆少し疲れたのか、来た時のような賑やかな話し声はせず、ほとんどの人は寝ていました。この時、私は一つの疑問が浮かびました。“箱根はなぜ箱根と呼ぶのだろうか？” 周囲の高い山々が大きな箱のように湖水を中に貯蔵しているからだろうか？ そしてこのように大きな箱はあらゆる箱の根源だからだろうか？推量に過ぎないが‥‥。

箱根旅行－“関所跡”、“芦ノ湖”、“大涌谷”、“海賊船”、“黒タマゴ”など、どれも忘れ難い思い出となりました。（横浜教室・学習者）

人の優しさ

葉 明珠

あるスーパーで旅行の抽選イベントに参加しました。思ってもいなかったのですが、当選してしまい、初めてのことでとても嬉しかったです。第一希望の河口湖に申し込みし、数日後、河口湖の旅行通知が来ました。実は私は一人旅が初めてなので、とてもドキドキして怖かったです。でも、せっかく当たったので、行かないともったいないと思って行く事にしました。

いよいよ10月19日河口湖旅行の日が来ました。集合時間は早いので、前日にちゃんと荷物を用意しました。そして朝横浜へ行く途中に財布を持って来なかった事に気付きました。やっと決心して一人旅を決めたのに諦めるのは残念だと思いました。とにかく集合場所に行きました。平日ならば、ただなのですが、その日は休日だったので、1050円を支払わなければならなくて、添乗員さんに相談しました。時間が早かったので、なかなか会社に連絡が取れず、出発時間がきてしまい、私は凄く焦ってし

まいました。優しそうなＡさんにお金を貸してもらえないかと聞きました。Ａさんは快く貸してくれたので、この旅ができて感激しました。そして第一休憩所の後に、バスの中で添乗員さんが、お茶とお金を貸してくれたので、涙が出てきそうになりました。そしてＢさんも同じく一人旅だったので、旅行中すごくお世話になって友達になりました。初めての一人旅は3人の恩人にお世話になり、たくさん幸せをもらい、とても感謝しています。

この経験は私にとって一生忘れない事だと思っています。（横浜教室・学習者）

落とし穴に気をつけて
（面白い日本語）

廖 忠

日本に来てから、日本語の勉強を始めた。九年も経ったけれど、あまり上達していない。だから、今も続けている。でも勉強しているうちに、日本語と中国語の間の落とし穴に気づいた。

中国人の日本語学習者と日本人の中国語学習者はお互いに相手の言語を学びやすいと思っているだろう。なぜならお互いの国には漢字があるので、発音が違っても、漢字を見れば、なんとなく意味が分かるから。そう思う人がきっと大勢居るだろう。漢字はまるで「架け橋」のように便利なものだ。実はこの「架け橋」は時々「落とし穴」に変身する。

こんな話を読んだ。ある中国の代表団は日本の大手企業を訪問した。訪問中、こんなスローガンを見た。「油断一秒、怪我一生」。日本人はさすがに責任感が強いなと感心した。「ただ油が一秒断つと、自分を一生咎める」という意味に読み取った。実は日本語の意味はそうではない。仕事は気を弛めないでまじめにやると言う意味だ。勘違いは同じ漢字から日本語を理解したためだ。

このような日中同形語はたくさん存在している。同形語はおおよそ3種類ある。ひとつは字形が同じ、意味も同じだ。物事の名前など。次は字形が同じで、意味も大体同じだけど、すこしニュアンスとか使う場所、対象とかが異なる。例えば、「愛情」と言う言葉、日本語では「男女の愛、親子の愛」に使われる。中国語の場合は「男女の愛」だけに使われる。

もうひとつは同形異義だ。漢字がまったく同じでも、意味は全然違う。日本語または中国語を学ぶ人はここで転びやすい。

この同形異義を代表する言葉に「大丈夫」を取りあげる。「大丈夫」の語源は中国儒家の代表人物の一人である孟子の言葉だ。儒家の思想「仁」、「義」、「礼」、「智」をそなえた人は「大丈夫」と呼んだ。つまり「立派な人間」と言う意味だ。この意味

は今でも中国語に保たれている。例えば「你真是个大丈夫!」と言う意味は「あなたは本当に立派な人間だ」。もちろん、「大丈夫」は男性のことに用いられる。女性には使われない。

友人はこの言葉で笑い話を作ってしまった。友人ご夫婦と日本人の友達が一緒にプールに行った。水泳はあまり得意ではないから、頑張って25メートルを泳いだ。「ハーハー」して、プールから上がってきた。日本人の友達に「大丈夫か」と聞かれた。来たばかりの友人はまず驚いた。「わたしが女の子なのに、何で、大丈夫と言われるの」、でも「大丈夫は悪い言葉ではないから、大分私のことをほめているのかな」そう思いながら、あいまいに「はい、はい」と答えた。私もほめてあげようと思って、相手に「あなたも大丈夫」と一言返した。日本人の友人は泳ぎが上手だから、もちろん「大丈夫」。でも、なんだかどこか勘違いしているような気がした。その時、友人のご主人が来た。友人は早速「大丈夫」の意味を聞いた。聞かれたご主人は、大笑いしながら、なるほど「大丈夫」かと、意味の違いを教えた。この場合の日本語の意味は「どうですか」「疲れましたか」で「立派な男」ではないのだと友人はやっと分かった。

このように漢字だけに頼って、日中の意味が異なることを良く調べないで使うと落とし穴にはまりがちだ。

私も落とし穴に落ちたことがある。日本のフィギュアスケート選手である浅田真央が好きで、浅田真央が出場する試合を必ず見る。ある日、日本テレビでこのような「氷上の妖精―浅田真央」という報道を見て、びっくりした。何でこんなにかわいい娘さんが妖精といわれるの。すごく不思議だった。でもすこし考えてみたら、「妖精」と言う日本語はきっと悪い意味を持たないように思った。浅田真央は日本の国民に好まれるから、決して悪口を言ってないと思って、辞書を調べると、やはり「精霊とか童話に現れたものとか」書いてある。中国語で言えば、「氷上の精霊」だ。

ところで、中国語ではどんな意味だろうか。「妖精」は悪いイメージばかりの言葉だ。①「人を惑わす女人」②妖怪、妖婦の意味だ。この言葉に対する感情色彩はまったく反対だ。もし中国語に一知半解な日本人が誠心誠意相手をほめたい場合、「あなたは妖精みたい。」を話したら、とんでもない誤解を招くことになる。「你像个妖精一样」と聞いた中国人はどうなるのかは想像に難くない。

言葉は気持ちや考えなどを伝える道具だ。中国語にしろ、日本語にしろ、よく調べて慎重に使うべきだと思う。（横浜教室学習者）

去り行く人情味

員 琳蓉

火曜日に勉強する仲間は、幾つかのクループがあり、机と机の間で気分転換ができ、心が温まる。何時だったか、一呼吸おく休憩の時、私の先生が「青木先生にチョコレートをあげて来て、ついでに、チョコレートが好きですかと聞いてねと。」と言われ、自分は一度中間の橋渡しの役をした事がある。青木先生からは「私の初恋の人だから、よく私の事知っているんですね」というお返事があった。冗談だったが、以前の時代の人間関係の繋がりが深いと感じられた。私は自分の先生が高校の同級生達との打ち合わせにも出合った事があり、先生は今でも、同窓会で仲間達と活躍しているので感心している。

一人の30代の日本人の知り合いが蝉の声は聞いた事があるけれど、見たことがないと話した。彼女は小さい時仲間とあまり外で遊んでいなかったと思うしかない。もう一人の同僚は、奥さん以外の友達の話題をあまりしない事から、日本の30代は、ゲーム時代に入って友人の親切さが分かる人が少ないと分かった。中国の25歳以下の若者と同じように、コミュニケーションと礼儀とをどうすれば良いかうまく処理できない。

私の幼少時代は、親友と一つのリンゴをかじり合い、集団での遊びをし、夏休みの一日をずっと一緒に過ごし、小さな争い事ですぐ絶交状を書き、2日間経った頃には、仲直り、絶交状を破ったりの繰り返しだった。

2005年、父は重慶に出張するきっかけで母と私の息子も同行した。その時、以前四川で10何年一緒にいた同僚に会うチャンスがあった。私の小学校の親友が40分間もバスに乗り、ホテルまで母を訪ねて来た。彼女が母と私の息子に会い、泣き出してしまった。それは、20年ぶりの再会だった。彼女のお母さんは私の母と同じ事務所での仕事仲間で、美しく体が弱い知識人のお母さんだ。その頃、共産党の団員は優秀な人と思われていた時代だった。彼女のお母さんは、病弱で暗い性格だった上、周りの同僚の中傷で団員になれなかったなど複雑な理由で共産党に入れなかった。そして、夏休みのある朝、事件が起きた。私は、友達を自分の家に誘い、宿題をしている間、彼女のお母さんは台所のドアをしっかり中から閉め、水槽に栓をし、水を貯め、お酒を飲んだ後、頭を水の中に入れ、自殺してしまったのだった。その時、私達は9歳だった。二人は、宿題をし終わり、彼女の家に戻り、水を飲みたかったが、台所のドアはどうしても開かなかった。少し変だったけれど、お母さんの事務所に行こうと二人は気楽に1時間ぐらい歩き、事務所に着いた。事務所にも彼女のお母さんはいなか

った、昼ごはんを食べ終わり、彼女はまだ昼寝をしていた時、訃報が彼女の伯母さんから伝わってきた。彼女のお父さんが足で台所のドアを蹴り、その場の光景に吃驚され、倒れたそうだ。今思えば、私がもしその日彼女を誘わなかったら、もし私達が大人の人達を頼んでドアを壊してもらっていたら（実は、ドアを開けるため、助けてくれる隣の大人達を探したが、皆さん仕事に出て、誰もいなかった。）、その後の彼女の人生は全く幸せだったろうと後悔している。彼女のお父さんは再婚したが、新しいお母さんは一人の弟になる男の子も連れてきた。中国では、物質が不足していた80年代初め、政府が一人っ子の家庭にしか少しばかりの奨励金を配らなかったので、四人に増えた家庭の姉弟は、二人とも美味しい物を自由に食べる事が出来なくなり、ハッピーな生活は昔の記憶に沈んでしまった。

今日は、また、彼女から手紙があり、先週、一人の利発だった男性の仲間の結婚式に出席したと言ってきた。この年で結婚！夫婦は顔が似ているが、はげ頭になって残念！彼女は、行く前に、長年会わない友達にどんな洋服を着れば、どうすれば三段腹が細くなるかと旦那さんに聞いたら、旦那さんはどうせ自分が行かないのだから君を見る人などいないと彼女に悪賢く笑ったそうだ。手紙で、愚痴と普段の細かい事まで腹を割って話してくれた。私は、内緒事を教えられ、耳を傾けてあげる相手がいて、幸せな世代だ。これからの若い世代はどうかと言えば、現代社会は豊かに進んでいるけれど、人と人との間の繋がりを無視する事は人間社会ではないと言う考えは真理であり、変わらないだろう。一つ一つの社会組織と各家庭が努力し、中国でも日本でも、日本の昔の下町のような人情味ある生活に戻れるようにしよう。（横浜教室・学習者）

帰国者の皆さんに明るい老後を

中村 明子

ユッカの会の活動の中に高齢の中国帰国者を対象とする「地域教室・しゃべり場」が出来て、今年で5年が過ぎた。今回ユッカの会の20周年記念誌を作るにあたって、この5年間の歩みを振り返ってみたいと一つのコーナーとして纏めている。参加者の人数の推移、行事の記録などのほかに帰国者の声も載せたいと、これまでユッカの会のスピーチ大会に参加された方の中から、何人かのスピーチをとりあげ本人の了承を得て原稿にした。

スピーチ大会のときも感動があったが、それはスピーチの内容もさることながら、苦労して覚えた日本語でこれだけ堂々とスピーチが出来ることへの感動も半分はあったように記憶している。今回改めて皆

さんのスピーチを読んで、孤児となってからの辛かった記憶、祖国日本への思い、帰国後の並々ならぬ苦労が切々と訴えられていて、万感胸に迫るものがあった。

今年、帰国者たちは長年にわたって日本政府と争ってきた裁判に終止符をうち和解に踏み切ったが、これを受けて政府は帰国者たちを支援する新法を制定した。これにより高齢となって生活保護に頼らざるを得なかった帰国者にも、いくらか人間らしく生きていく自由がもたらされたようだ。例えば、中国の養父母や親戚を訪問したり、国内や国外に旅行をしたり、資格を取ったり言葉を学んだりするための助成を認めたり、生活保護の下では厳しく制限されていた幾つかの枠が取り除かれた。このことは帰国者のために素直に喜びたい。しかし、法律を作ればそれでよいと言うものではない。それを運用して法の精神をを十分に活かしていくのはこれからの行政にかかっている。まだ新法が出来て日が浅いのでせっかちな批判は避けたいが、帰国者の方々は大部分60代から70代に達しているのである。これまでの厳しい人生を歩んできた人は病を抱えている人も多い。地域社会の中で安住の場所を得ているかどうか、一般の日本人と同等の福祉の恩恵を受けているか。問題は山ほどある。どうか国は、地方行政は、帰国者にとって祖国日本が本当に安心して希望を持って老後を暮らしていける場所であるようにきめ細かな配慮に努めていただきたい。これからの皆さんに希望と夢のある人生をと願わずにはいられない。（横浜教室・ボランティア）

孫と話がしたい

塙 雅夫

先日、久しぶりにかつての同僚たちと飲んだ。その折、司会をした男が開会に先立ってこんなことを言う。「今日は病気と孫の話はやめてください」。

70を過ぎた男が集まれば、もう仕事には関心はないし、女も話題にならない。なかにはかみさんの愚痴をこぼす者もいるが･･･。残念ながら共通の関心事といえばまず病気。家庭での比重はとうの昔に女房や子供から孫に移っている。

病気は誰も抱えている悩みだから情報はほしい。だが聞いていて楽しいものではなかろう。孫だって、預けられた時の苦心談に「そうそうオレのところだって･･･」と相槌を打っても、積極的に聞きたい話でもない。司会者の気持ちよくわかる。そんな話を長々とされては座がしらける。

しかし、夫々家に帰れば別だ。わが家は息子が離れて住んでいるせいか、たまに現れ狼藉を働いて行っても年に２、３回上陸する台風のようなもので殆ど問題にはな

らない。だが一緒に住んでいて、毎日面倒をみている人たちは違うだろう。煩わしさもあろうが、可愛さも一入の筈だ。

当初は会社勤務の若い人に限られていた日本語指導がいつの間にか年配者に移り、意識も変わる。そして彼等の関心事が他人事ではなくなった。女性はトシはとっても生活のために買物に行くし、近隣とのつき合いもする。一方、男性は語学が不得手なこともあって、他人との会話になかなか入っていけない。孤立しがちで教室も長続きしなくなる。

彼等にとって唯一居心地がいい場所は家庭だが、多忙な子供たちは父親をそうそう気遣ってはくれない。心おきなく中国語が喋れる女房はトシはとっても現役で、男に比べれば遥かに忙しい。娘や嫁が働いていればなおさらで、家での存在価値は大きく暇な亭主などとは全然違う。

学校や幼稚園など送迎で面倒をみてやっている筈の孫は完全に日本語世代で、祖父の相手をするほど中国語は堪能ではない。ひょっとすると中国語を回避している。そう言えばＴＶも漫画も全部日本語だ。

新しい生徒を引き受ける時は授業を始める前に「どんな日本語が覚えたいか」と訊くことにしている。

若い人は、同僚と話す言葉、偉い人と話す言葉、日本人と同じように話したい等々だが年配者は違う。病院で話す言葉が最も多く、次いで区役所、郵便局などがくる。そして驚いたのが、もっと孫と話がしたいだった。

何年か日本にいれば日常生活に必要な言葉はある程度わかるようになる。しかし孫たちはそれでは満足しない。「孫と話せるようにもっと日本語を勉強したい」と言ったお爺ちゃんが今まで3人はいる。

嘆くことはない。日本にだって同じような境遇、心境のお爺ちゃんが何人もいる。一緒に勉強しよう。そして孫と話をしよう。孤独に陥らないためにも。

旅順

青木 きん

私の故郷大連にある旅順、その名の由来は、文字通り「旅途順利」（旅の道中が順調である）からきています。現在は、大連市の一行政区、旅順口区で、遼東半島の最南端に位置し、黄色の黄海と青色の渤海に接する三面海に囲まれた、面積約506平方キロ、人口約21万人の国家級風景名勝区、国家級自然保護区であり、また、天然の良港、有名な軍事要塞として知られています。

旅順は、甲午戦争（日清戦争）、日露戦争の激戦地として有名ですが、清の南子弾庫や、ロシアの望台砲台など、当時のまま保存され公開されているものもあります。

また、旅順駅、旅順博物館は20世紀の初めロシアが建てたもので欧州建造物がそのまま今でも使われています。

黄金山海水浴場は旅順の東部の黄海に面し、背後に山をいただく景色のとてもすばらしいところで、人気があり、大連の四大海水浴場のうちの一つにもあげられています。

白玉山は、（山石がまっ白で玉のようだったのでその名が付いたともいわれていますが）山頂から、旅順軍港と市街地が一望に見渡せ、すっきり晴れた日などは、気持ちよく、すがすがしい気分を味わうことができます。

蛇島は、世界唯一の毒蛇島として有名です。旅順港の西北2.5海里にあり、蝮蛇が2万匹近く生息している国家重点自然保護区です。

龍王塘貯水池は1924年に日本人の手で作られたもので、周囲には百株余りの桜の木が植えられています。春、桜の花が美しく咲きほこる頃、誰もが故郷日本を思い出すよすがとなっていました。

幼い頃、父方の祖父母はよく私を龍王塘の花見に連れて行ってくれました。祖母は、「桜は日本の国花で、多くの日本人は桜の花が大好きなのよ。桜の花びらを見てごらん。一枚だけみるとそうでもないけれど、満開の桜の木全体をみると本当にきれいで美しいでしょ。人も同じ、たくさんの人が気持ちを一つに寄せ合えばすばらしいことよ。」また、祖父母は、「あなたが大きくなったら必ず故郷の日本に連れてって桜を見せてあげる、日本の桜はもっともっときれいで、うっとり見惚れて帰りたくなくなるくらいうつくしいよ。」と私によく言っていました。

今、私は縁あって祖父祖母の故郷である日本で暮らすようになりました。日本の桜は祖父母が言った通り綺麗です。そして、春、桜を見るたび、私は、龍王塘の桜を思い出します。祖父母が私の傍らにいて、手をつないでくれ、本当に愛情深く可愛がってくれていたことを懐かしく想います。

皆さん、機会があったらぜひ、旅順を訪れ、歴史の跡、景色の美しいところを見てください。（横浜教室・学習者）

回顧 黄山行

飯田 靖子

最近、再放送かもしれないが、BSで黄山遊覧の番組を見て、二昔程前に訪れた黄山への旅のことが蘇ってきた。記録と記憶を頼りに、当時を振り返りつつ記してみたい。

時は9月の半ば過ぎ、かねてから雲海の中の絶景に身を置いてみたいと黄山への旅に出た。

空路上海へ

上海着後休む間もなく、上海の西北に建つ名刹玉佛寺を見学。玉佛寺は典型的な宋代宮殿式の建物で、鮮やかな朱色の柱に黄色い壁が印象的。玉佛とはミヤンマーから贈られた美しい白玉製の釈迦像で、僧侶慧根により運ばれてきた横臥佛（釈迦牟尼が最期の時を迎えようとしている姿を表したもので、涅槃像ともいう。）と坐佛（釈迦牟尼が悟りを開いた時の姿を表していて一つの玉から彫りだされているという）の2体があった。

杭州経路で安徽省へ

杭州を通って目的地へ向かうのだが、時間が無く西湖すら見られなかった。杭州は小学校５年生の時の修学旅行地だったが、当日発熱の為参加を断念した悔しい思いが瞬時に蘇り、縁の無さを嘆いた。バスに揺られること8時間、やっと黄山の麓に着いた。現在は空路で、もっと簡単に行けるらしい。この長丁場を北京からのスルーガイド楊さんは、退屈を紛らわせてくれる為、中国の歌を美声で披露してくれた。「你从哪里来我的朋友」など一緒に歌うと驚いて、とても喜んでくれた。この楊さんとは今でも賀状のやり取りが続いている。

黄山へ

黄山は中国十大風景名勝の一つで、安徽省南部に屹立し、黄河、長江、長城と肩を並べ中華民族のシンボルとなっている。

本来なら何百と言う石段を登って行くのだが、一行は全長2800ｍのロープウェイに8分間乗り黄山の懐と言われる場所に着いた。その時突然雨が降ってきたので、すっかり気落ちし、足取りも重く、黄山西海飯店（ホテル）に着いた時には既に暗く、強い風まで吹き始めていて翌日からの行動が思いやられた。何度か此処に宿泊した事のある添乗員の薦めで、夜食に「焼きサンドイッチ？」を注文。その美味しさに満足し、目の皮が弛み眠りに着いた。

2日目

早々と目覚め、窓を開けてみると、思いもよらず雨は止んでいた。急いで日の出を見に出かけたが、現地ガイドが、終わっていた夏時間で予定を立てていた為、1時間遅くなってしまい、山頂に着いたときには雲も多く、残念ながら日の出の時間は過ぎてしまっていた。この時、出発が遅くなったのを取り戻そうと、高地で走る時間が多かったので、夫は脳貧血を起こしてしまい、懲りたのか朝食後再度出掛ける時は、駕籠に乗っての遊覧となった。駕籠と言っても椅子の両脇に長い2本の棒をくくりつけた

駕籠屋

だけのものだ。

黄山の風景の特徴は、怪石の他に、奇松、雲海、温泉があり、人呼んでこれを四絶という。黄山では、あらゆる名所がイメージで形容され、夢筆生花、猴子観海、迎客松等耳にすれば容易にその姿を連想することができる。

黄山といっても一つの山ではない。東西30ｋｍ、南北40ｋｍ、面積1200平方ｋｍの区域に、大小合せて72の峰が鋭い矛のような形で天を突き刺し、上り下りの石段が約2万段ついているのだ。主峰は蓮花峰で海抜1860ｍ、また光明峰と中央に位置する三つの峰はどれも海抜1800ｍを越えている。どの峰も硬い岩石だけで出来ており、垂直にそそり立った岩肌から松の木が突き出て緑の枝を広げている。

黄山の松は油松で、本来は平地に育つものだが、種が風や鳥類により、この断崖絶壁に運ばれた後成長し、すっくと聳え立つもの、山崖に這うように生えているもの等、様々な姿でこの山を飾っている。湧き出る雲、種々多様な形の怪石、奇松は人を惹きつけて止まない。雲海は濃淡に入り乱れ、千変万化に出没し、息を呑む思いで見とれてしまう。

飛来石

ガイドに付いて先ず飛来石を見に行った。重さ役400噸、高さ12ｍ、幅8ｍ、厚さ役3ｍの大石だ。「こんなに大きな石は何処から来たの？」と尋ねると、「日本の富士山から飛んで来た」との答えが返って来た。では他の国の人にはなんと答えるの？と問い質したかったが、先を急ぐガイドに急かされ叶わなかった。ふと見ると上海の美術学校の学生が熱心に水墨画を描いていた。ここ黄山では画材、画題には事欠かないだろう。

光明峰で一服しながら金亀子、蓮花峰、石門等を眺めながら、素晴らし景色を満喫した。「夢筆生花」は頂が錐のように尖り、土の無い所に松が生えていて恰も巨大な筆のようだ。左側にはお誂え向きに頂が五分された峰があり、「筆架峰」と呼ばれていて、もし筆が落ちれば上手い具合に、この筆置きの上に落ちることになるのだろう。天然の造形の妙という外はない。観景台に立って見ると、水墨画のような奇峰が眺望でき、近くには林立する怪石が堪能できた。天下の奇山という賞賛に相応しい奇景だ。

連心結

周りに太い鉄の鎖が張り巡らされていたが、所狭しと錠前が下がっていたので、不思議に思いガイドに聞いてみると、恋人達が此処に登った時、永遠に離れることのないように、鎖に錠を下げ、ハンカチを結んだ後鍵を掛け、永遠に開かれないよう鍵を山間に投げ捨て、共白髪までの愛を誓うのだそうだ。神秘的な風景に似合うロマンティックな風習が未だに残っているとのことだった。

帰途、指絵画家を訪ねた。彼は指に墨をつけ筆を使ったように見事なタッチで水墨画を一気に描く。客の要望に応え、頭の中に刻み込まれているであろう黄山の絶景を事も無げに描いていった。

黄山での遊覧は石段の上り下りの繰り返しが続くため、夜膝がひどく痛みだしたので、気功師に来てもらい20分ほど治療してもらったところ、すっかり痛みはとれてしまい、翌日の不安も解消した。

三日目

日の出を見に行く希望者はいなかった。しかし、黄山に登ったからには日の出を見ない方はないと思い、一人で行く決心をした。時間が迫っていたので走りに走っていると、途中ですれ違った中国人の女性が「今日は見えそうもないから戻りましょう」と言ってくれたが、どうしても諦め切れず、彼女に感謝しつつ走り続けた。清涼台に着いた頃、折りよく雲の中から太陽が出てくるところだった。波のように漂う雲海の彼方が、ほんのり紅くなったかと思うと、見る見るうちに茜色に染まり、程なく真っ赤な太陽が眩いばかりの放射線状の光を放ちながら、ゆっくりと顔を出してきた。神秘的なご来光に思わず周りにいた中国人たちと共に「太陽出来了！」と叫んでいた。以前にも台湾の阿里山で初日の出を見る機会があったが、その時と同じ様に身の引き締まる感動と興奮を覚えた。

昼食後、見飽きることのない黄山の景色に別れを告げることになる。一同去り難く、ロープウェイの中から見慣れた風景を俯瞰しながら下山した。よく桂林と比較して「桂林の山水はセレナーデの如く、黄山の奇景はシンフォニーの如し」と言われるが、後日桂林に行ってこのことを思い出し納得した。

歙県→屯渓→黟県→宏村→屯渓

下山後バスで歙県を訪ね、明代の住宅地「潜口民宅」を見学しながら屯渓へ向かった。徽省商人の故郷、屯渓老街は古の雰囲気が残る街だ。翌日、朝の自由時間に三輪車に乗り少年宮付近の公園に案内してもらった。太極拳の練習風景が見たかったので、出会った女性に訳を話すと、90歳というが、どう見ても70代にしか見えない老師を紹介してくれた。早速呼ばれた弟子の少女は、簡化24式太極拳を行ってくれた。正確且つ華麗な動作だった。ホテルへの帰途寄った市場では、肉、魚、野菜はもとより、生きた鴨、野兎も食用として売られていた。

牛の腸

牛の胃袋

朝食後訪れた黟県は、黄山山麓にある風光明媚、気候温暖な地で、小桃源といわれている。老街は、今でも明、清代の建築群が残っていた。宏村の家は全て白塗りで、村落は牛の形を呈し、村の中をくねくねと曲がる小川は「牛の腸」「牛の胃袋」などとユニークな名前が付けられていた。丁度北京電視台が取材に来ていたが、この村には電気はもとより、水道さえなく、一家に3、4人の子供がいて、人々は極自然な暮らしを営んでいた。昼食にこの土地で採れた自然栽培の青菜、馬鈴薯、栗等をご馳走になったが、どれも昔ながらの風味で、一同舌鼓を打った。

この後、屯渓の老街をゆっくり歩いたが、宋代の情緒を残した800もの石畳が続き、歴史の古道に迷い込んだような散策だった。今回ＴＶで見た老街は随分モダンになっていたような気がする。

此処で求めた漢語成語小詞典は、今でもページをめくることが多い。実は「入郷随俗」＝「郷に入っては郷に従え」等日本語にもピッタリくるものが多いので、日本語から引ける自己流対訳成語小詞典なるものを作ろうと取り組んでみたが、性格上長続きせず頓挫状態のまま、ハードディスクかフラッシュメモリーの何処かに休眠状態になっている。

上海へ

午後10時再び上海の地を踏んだ。翌日の午後豫園を散策。此処は幼少の頃よくアマに連れられ遊びに来た所だ。豫園は明代の名園で、「街の中の山水画」と上海人が自慢する所で、此処の特色は「虚実相関」「以小見大」「疏密有致」と言われ、江南の庭園美が余すことなく集められている。豫園

商場は相変わらず賑やかで、狭い道の両側には百軒以上の商店が軒を連ね、一日中買い物客が絶えず、ごった返していた。懐かしい「五香豆」を見つけたので買ってみた。一粒口に入れると、昔と変わらぬ香が口中に広がり、噛みしめていると、子供の頃この地「上海」で近所の友人達と、親の目を盗んで買い食いを楽しんだ事が思い出され、独り笑いしながら雑踏の中に紛れ込んだ。

旧居を訪れたかったが、自由時間が取れず、後ろ髪を引かれる思いで第二の故郷上海を後にした。

2010年には上海万博が開催される。万博開催は中国の更なる経済発展の原動力となることだろう。それに伴い、朝などに湯気の立つ焼いた豚饅頭や油条入りのおこわ等を売る屋台が、また路上で見かけた野菜売りも、万博までに消滅するとのこと。年々懐かしい風物が姿を消してしまう。ますます「故郷は遠くにありておもうもの」の感が強くなるだろう。（横浜教室・ボランティア）

表方と裏方

日向 和子

11月末学生時代のゼミの恩師の「七回忌の集い」が行われた。

当日司会をまかされていた方から「日向さんは先生との関わりが長かったので、ご挨拶をして欲しい。」とのお電話をいただいた。

その少し前、長い間お手伝いをしている会の先生方の講演会が札幌・旭川を中心に行われた。

講演会開催の中心になっている部署から、「当日配布のパンフレットに前事務局長の思い出を書いて欲しい。時間がないので出来るだけ早く･･･」といわれた。「他の人に･･･」などいろいろ言っている暇がない事は、関係者の一人としてわかっていたので急いで書いて送った。

ところが、当日頂いたパンフレットを見て,扱いの大きさにびっくり・・・裏方の者が表に出てしまったと後悔した。

そんなこともあって「受付などの裏方はなんでもするが、挨拶は許して・・・」と電話を切った。

受話器を置いて、あ！、また言ってしまった･･･何かから逃げたい時に、裏方はするけど･･･の言葉を･･･と反省した。

広辞苑で引くと

表方

・表の方面

・劇場で、観客に関する業務を行う従業員

裏方

・貴人の妻。特に本願寺法主の妻。

・他人の妻の敬称。

・芝居などで、舞台裏で働く人、衣装方・小道具大道具方など。

・比喩的に、陰の協力者。

とある。

あるお茶会を前にしてのこと、先生から「Ａさん・Ｂさん・Ｃさんに今度のお茶会でお点前をしていただきましょう・・・」と言われ、3人は（私も3人の中の一人であった）「大勢のお客様の前でお点前などしたら、間違えて先生に恥を掻かせてしまいます。お水屋のお手伝いをさせてください。」と口をそろえて言った。すると先生は「それは驕った言い方です。お水屋が出来るということは完全であることですよ・・・」といわれた。お水屋はお茶会の裏方であるが、言われてみれば、いつも大先輩たちが仕切ってくださるからスムーズに進んでいく。お点前の進み具合を裏で見計らってお水屋は動いていく。

先生が3人にお点前をさせてあげようとの温かいお気持ちからおっしゃった厳しいお言葉である事は十分理解しているが、時々自分が使っている「裏方ならしますが・・・」の言葉の使い方に戸惑ってしまう。ものごとは、表方と裏方から成り立つ。成り立つまでの関係者の行為に表方も裏方もなく、どちらも上者でも下者でもなく、どちらもの想いも謙遜でも驕りでもない。自分のその時の気持ちは、どう言葉を使ったら的確に表現出来るのだろうか・・・

日本語は難しい・・・

活動を通じて

波多野 重信

ユッカの会の活動に参加するようなって3年がたちました。

横浜での地域教室、補習教室といろいろな行事への活動です。よく知られている日本のことわざ「石の上にも3年」のとおり、何か新しい仕事や活動を始めたならば、やり続ける期間の目標を、がまんの目安を3年とする。学校の年限もそうであるように、この3年という期間は私たちの生活感覚になじみがあり、このことわざを身近に感ずる理由だと思います。

では、私にとってこの3年はどうだったのだろうか、何が残ったのだろうか。先輩諸氏と比べてみると、わずかの経験からでしかないですが、一つの区切りに、自戒を込めて振り返りつつ、この先の展望につながる何かを求めて見ます。

3年間継続して行ってきた活動は、毎週木曜日に行われている地域教室での日本語学習と、補習での英語と日本語学習の補助です。週に一度だけの学びの場ですが、休まず、継続していくといろいろと思いが浮かびます。

先日、20周年記念誌つくりのために、補習教室のボランテイアによる座談会が持たれました。その時の話題に、「日頃の学習の場で、どんな工夫をしていますか。」がありました。「工夫？」。改めて日頃、どんな工夫をしているか考えてみると、私には、逆にあまり工夫していないなと実感させられる方が多いです。日頃から、工夫しないままに学習者と接し、過ごしてしまっている。

恥ずかしい実情ですが、今、素直に、しょうがないという気持ちで、なぜ工夫が足りないのか考え、反省してみます。

1. 週1時間の勉強に準備などしなくても、問題集や教科書の復習などですませてしまえばいい、めんどうだと思う気持がある。
2. 学習する期間が、学習者のいろいろな事情により一定せず、2、3週間で終わってしまったり、途中で来なくなったりし、計画が立てづらい。
3. もちろん、言葉の問題があり、学習者との意思疎通が思うようにとれない。何を、準備していいか難しい。
4. 一人ひとりの学習意欲、理解度が異なり、同じようにはいかない。
5. 受験を控えている場合は、お互いに受験問題集にたよってしまう。

まだあるかと思いますが、日頃の学習を通じて以上のようなことを感じています。

さて、ではこんな状況のなかでどんな工夫をしているのか、ボランテイアの誰もが行っていることでしょうが、自分なりに挙げてみますと。

○最初に学習者と、出来る限り、どの分野の、どの程度のことを学びたいのか確認しあう。学習し始めてから、学習者が今まで学習してきた内容をどれだけ理解し、身につけているかを探る。

○できれば、教材をそのまま使うのではなく、少しでも学習者に合ったものになるように手を加える。理想は、なるべく手作り。変化を加えるために新聞など、読み物として利用する。

○週に1度、1時間半の中で学習するだけでは効果はあまり望めない。学習する楽しみを感じ取り、刺激を得て、学校での勉強とのつながりとなり、自宅学習につなげられるようにより助言し、課題や宿題も出してみる。

○なるべく、前回の復習を欠かさない。

一個人の、3年間の無我夢中での経験からのものです。いろいろな条件がからみあっています。学習者一人一人も置かれている状況は大変です。年齢も異なります。考えれば考えるほど難しさが痛感され、あきらめの思いが大きくなるようですが、このつたない、反省を繰り返しながら、少しずつ少しずつ、ともかく続けていこうと思っています。（横浜教室・ボランティア）

ユッカの会と共に

内山 和子

暦もあと1枚になりました。10月にユッカの会の20周年祝賀会がありました。その年月は、娘を嫁がせたアメリカでの体験が私の人生観や日常生活を大きく変えて行った年月と重なっていました。そしてユッカの会との出合いは、県民センターで日本語を教えるボランティアの募集をしている日に私は居合わせたのでした。そして或る年のクリスマスの前後、2週間程通ったアダルトスクールのボランティアの先生の情熱こもるレッスンと、お別れの時ご自身のノートをコピーして下さって肩を抱き握手して下さったのを思い出して‥‥

その時から、何も深く考えることもなく話していた日本語に本気で向き合うことになりました。何人もの外国の方と出合い、短い間に仕事を見付けて行った人、出産のためお別れした方、帰国された方もたくさんの思い出になりました。勉強も、人により必要な事に合わせてテキストを探すのも楽しみな事で、序でによい本を見付けることもあります。

学習は私なりに進めているのですが、気になることがあります。殆どの中国の方が「・・・するのことよ」「食べるのこと !! 」などと云っています。私たちはそういう云い方をしません、と全部の人に云いました。先日久しぶりに7年前に勉強した方に会いました。家族ぐるみでにぎやかな会話の中で「・・・のこと」を連発して楽しそうに話し、違和感のない様子に、「これって方言？」などと考え込んでしまいました。いま学習している方に此の話をしたら納得出来ないようで、「どうして？」とくり返します。動詞の辞書形の次は「。」もうひとつ連体形なら名詞が来るので「・・・のこと」と続けて使えないと云いますと「それは解りますが、聞くのことの“の”は“的”で別に意味はなく、自然にそう云っています」とのことで、今度は私の方が解らなくなるような始末でした。でも多分これからは気をつけて下さると期待しています。

よく考えてみると、別に通じない訳でもないし、そのままで楽しそうに暮している方に今さら云うこともないとか、学校に通うようになった子供たちとの会話の中で現代文の日本語を知ってもらえればなどとも思います。

此の頃私の日本語はもう古いのでは･･･と気になる時があります。私自身の勉強ももっとしたいので、そういう機会が欲しいと思います。年齢的に残り少なくなった今、何かにつけて年だからと年のせいにする自分を情けなく思う此の頃、はからずも10年前からの思い出を辿ることになってしまいました。日本語の勉強に集中できるのが生き甲斐のひとつ、と嬉しく思っております。（横浜教室・ボランティア）

日本語の勉強を頑張ります

呂 名蘭

ことしもクリスマスが間もなく来ますよ。ユッカの会の毎年の慶祝会は賑やかで嬉しいです。実は日本に来た中国人が一番困難な事は、日本語で交流することができません。また生活に必要な事も勉強しなければなりません。

私はユッカの会の日本語勉強会に参加しました。みんなと仲良く勉強をしたいです。先生たちは親切で優しく教えて私たちを手伝ってくれました。だから日本語の知識をだんだん積み上げて、そして先生たちと友人になりました。

学習者たちはみんな生活にねばり強い人たちです。そして得意の趣味もいろいろあり、一緒に日本語勉強するとき楽しいね。

先生たちは教えてくれることがおおい、例えばお料理とか、手作りの物とか、観光旅行とか、ゆかたを着て写真を撮る等、とても面白く嬉しいです。

もちろん初めて日本語勉強会にいったとき、自分のあたまが良くない、むずかしいと感じたことがあります。自信が少ない時、中国人の友達から電話が来た。「日本人に近づくよう勉強しましょう」ずっと覚えています。8ヶ月ぐらい日本語を勉強しましたら、会話をできるようになり仕事に行きました。日本語の勉強会に行かないこともありました。でも職場で間違うことが沢山なのでもう一度考える。日本語勉強会に参加することはとても重要です。

いままで、4年ぐらいユッカの会とJ.C.C.の会に行きました。勉強は大好きです。いつも困っている時、先生たちは手伝ってくれました。

私から先生たちにもう一度「どうもありがとうございました」といいます。（戸塚教室・学習者）

アニメと日本語学習

向江 裕行

「先生、“三千世界の鴉を殺し、主と朝寝がしてみたい”って、どんな意味ですか。」

わたしが教えていた中国の学校で、ある学生からこんな質問が飛び出しました。大学4年生のお嬢さんです。「えっ？　何でまた急に……。」とびっくりしていたら「幕末関連の本を見ていたら出ていました。」とのこと。これは江戸末期から明治にかけて日本の近代化に大きな役割を果たした高杉晋作が作ったと言われている唄（都々逸）で、意味は云々……、と一通り説明しておいたのですが、いささかあわてました。

日本語のクラスにはいろいろなレベル

がありますが、上級になると日本人教師でもたじたじとするような質問が出ることがあります。それも日本語関係だけではなく、このような日本の歴史や文化に関するものも聞かれますから、教師たるもの安閑とはしていられません。とはいえ、まさか都々逸の質問が出るとはねえ……。

こうした、教師をびっくりさせるような質問をする学生は、だいたい日本のアニメをとてもよく見ています。彼女も忍者ものが大好きで、これまでにもときどき伊賀がどうの、藤堂高虎がこうの、といった質問をして、わたしも目を白黒させながら相手をしてきたお嬢さんでした。そんな途中でこの都々逸も目についたのでしょう。

また、同じアニメファンでも、こんな学生もいました。

新しいクラスが始まり、その第一日目、まず自分の名前を日本語で言い同級生にも覚えてもらうため、一人ずつ自己紹介をやったときです。半分ほど進んだところで、二十を過ぎたかどうかといった感じのお兄ちゃんが前に出ました。

「おれ　シン　テンケツだ。よろしくな。」

あれ、こんな言い方どこで覚えたんだろう、と思って聞くと、アニメだとのこと。初めての相手にこれでは具合が悪いので、「できたらていねいな言い方で。」と言ったら、こんどは「おれは　シン　テンケツです。よろしくです。」

少し詳しく聞くと、彼は一人でアニメのせりふを覚えたらしく、普通体とていねい体についての区別はほとんど知らないことがわかりました。さっきの忍者ファンのお嬢さんはアニメだけではなくドラマや本などにもたくさん触れていたので、会話のときにも文体の区別があることを知り、自分でもそれを使えるように練習していたのですが、こちらのお兄ちゃんの方はそれが全くなかったのです。ついでに言えば、彼に会話文を書かせると「新八。おめえどこいってたんだ。」という調子。どうやら「銀魂」ファンだったようですね。

このお兄ちゃんと同じような傾向があるのは、バーやスナックなどで働いている中国人女性です。わたしの学校でも、一クラスに数人はこういう人がいました。夜、上海のスナックの日本人客は「あなたはどこの生まれですか。」よりも「あんた、どこからきたの。」とくだけた話し方で小姐に聞く人の方が多いでしょう。彼女が経験できる日本語環境はこの“職場”だけですから、これがふつうの話し方なのだ、と当然思い、その話し方をまねします。そして、どこでも誰に向かっても「あんた、どうしたの。」「これ食べない？ おいしいよ。」となるわけです。

こうした様子は、常に周囲のいろいろな

話し方にさらされる日本国内では、その多様さによる影響である程度は薄められるのですが、外国では日本語を聞く機会そのものが少ないのですからそうはいきません。

困ったことに、一度こうした習慣が身についてしまうと、その修正にはとても時間がかかります。ですから、学習者が「できるだけ“白紙”に近い」ことは言葉の習得においては大きな意味を持っています。

先に挙げた若い二人に限らず、いま、中国の若い人には日本のアニメファンが大変多くなっています。北京大学や清華大学のような超有名校でも「日本動画倶楽部」のメンバーは大変な数です。彼らはアニメを土台にしてさらに高いところへ手を伸ばし、日本全体を理解しようとしていますし、実際に大きな効果を上げています。

一方では、そのアニメの中に閉じこもり、その世界だけが日本だ、と思ってしまう若者もいます。でも、彼らは“熱さ”では引けをとりません。適切な指導さえあれば大きく育ちます。学校などとの違いは、きちんとした指導者がいるかいないかですから、指導者の果たす役割や責任はきわめて大きいと言えるでしょう。日本語教育の世界だけ見てもそうですから、他の分野でも同様のことが起きているかもしれません。アニメなどに熱くなっている若者はきちんとした刀鍛冶が厳しく打てば“名刀”が生まれる。「鉄は熱いうちに打て。」は、“練習”が必要な分野では真理ですね。

ついでですが、冒頭の都々逸のことを質問したお嬢さんは、去年、能力試験1級に合格し、いま、三重県の津市で大学院進学の準備中、“べらんめえ”のお兄ちゃんは、この１２月７日の能力試験を受けたはずなので、結果がどうなるか楽しみにしています。（横浜教室・ボランティア）

２０年の蓄え

中 和子

1990年5月3日に会報「たより」創刊号は発行され（当初は年2回発行）、創立20年を迎えた本年は20号となります。

創刊号には「肉親探し、帰国者の生活指導･･･と長年にわたって奉仕活動を続けてきたわたしたちは、ここにその2世を守り育てるべく新しい活路としてユッカの会を結成するに至った」と沼波代表の言葉があります。

それから今日まで、ボランティアの一人ひとりが地道に学習者と向き合い、しっかりと踏み固めたユッカの道ができあがったように思います。それは帰国者の方々（広くは外国人）への支援のあり方、ボランティア活動の捉えかたなど事務局会議

で合議し、違いを共有する姿勢で取り組めるボランティア集団であったことが幸いしたように思います。

日本に定住する方々への日本語やパソコン学習、児童生徒への教科学習支援、大切にしてきた交流活動は年々活動の広がりを見せています。そしてその根底には〈共に生き支え合う〉思いがありました。知識のつめこみではなく楽しく交流することで様々な気づきを育み、小さな課題は少しずつ解決の方向へと歩んできたように思います。その歩みは補習教室、日本語教室、パソコン教室、地域教室、しゃべり場、手芸の会、交流活動、生活や進路の相談活動などを通して随所に感じられます。成人対象の日本語教室はいつも待機者であふれ、3世の子どもたちが通う補習教室には様々な国から様々な課題を抱えた80名をこえる子どもたちが参加し、地域教室･しゃべり場には帰国邦人100名を越す登録者、課題をつきつけられながらの活動ですが、共に楽しみ、学ぶ姿勢でこれからも多くの機関と連携し、よりよい活動をと願います。

会員の皆様には座談会やアンケートへのご協力ありがとうございました。今、そのまとめの作業をしております。皆様から寄せられた様々な気づきを盛り込み「ユッカの会ならではの蓄え」が集約された冊子になることと思います。ささやかな２つの冊子ですが年度末（2009年3月）には皆様のお手元にお届けできることと思います。

2009年が皆様にとってよいお年になりますように！（ユッカの会・事務局長）